山崎郷土報

No.69

62.3.23

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話62－2000

近世初頭の山崎藩（二十七）

島田　清

二、池田輝澄時代（続二十六）

○　家中騒動の種火

世の中のことは、地震や噴火のごとく、全く予知できぬうちに起こることがある。科学が発達し、地震予知観測所が置かれ、専門の技術者が研究に当っていても、伊豆大島の三原山噴火のように、全島民が離島しなければならぬことが起こる。しかし、人間の世界では、「事件発生」の予想が、だいたい、つくものだ。ただ、これには、深い思慮と、すぐれた叡知がなければならない。しかも、これをそなえたものが、早い時期に、このことの「種火（たねび）」となるものを見つけ、それに対処する用意・画策をめぐらさねばならない。そして、こんなことをしておれば、やがて、大きな問題に発展するだろうとの予見を立てて、極力、その回避に骨を折らねばならない。

ところが、こうした人は、なかなか得にくい。仮りにあったとしても、その人の予見、見透しを聞く側に、それだけの人がなければ、これも亦、だめである。せっかく、遠くを見とおし、深くおもんばかったことであっても、それを理解し、なるほどそうだ、と合点できるためには、その人と同等の思慮なり、叡智なりを持っていなければならない。それだけにむずかしく、人の世の容易ならぬことをうかがわせるのである。

世の中の紛争や闘争は、元来、人間の我慾・我執から起こる。

目　次

一、近世初頭の山崎藩（二十七）……島田　清…一
二、宍粟郡における若干の小字地名…建部恵潤…四
三、地名小噺　その三　清水口……資料部…九
四、深情と地蔵崇拝……加藤昭彦…一〇
五、丹波路旅情……織金義雄…一三
六、昭和六十二年度役員……一六
七、事務局だより……一七

大きな争いも、もとをただすと、案外小さいところから出ている。もし、ひとりひとりがそれをつつしみ自制すれば、そこまで行かなくてすむのである。しかし、それがなかなかむずかしい。

第二にいえることはこうした争いを仲裁し、取り鎮める人が居てくれれば、それで、ことはおさまる。しかし、これも、その人を得ることが容易でない。自己の思惑や都合、或は面目、因縁、また、そのとき、そのときに起こる感情の波にもてあそばれるようでは、到底だめだ。こうしたことがいろいろと組み合わされ、積み重なれば、はじめは小さいことがらであっても、しまいには、収拾のつかぬ大事件に発展する。池田家の家中騒動も、ことの起こりから、最後の処断に至るまで、かなりの時日があったわけで、途中には、何度か、これを収拾する機会があったのであるが、それが、結局はできず、ずるずる深みにおちて行き、遂に、改易の処分を受けるようになるのは、要するに、上の不明、佞臣の跋扈・跳梁、当時者間の対立・反目・粗暴などの諸要素がかさなったもので、残念なことではあるけれども、一面、やむを得ぬことであったといわねばならぬ。ままならぬ人の世の一面を、まざまざと示すできごととして受けとめるよりしかたのないことであろう。以下、筋道を追って、述べてゆくこととする。

ことの起こりは、金銭の貸借である。金と酒と女とばくちが、とかく、ことを起こすもとをつくる、とは、よく聞くことばであるが、家中騒動の「種火」は、このうちの〝金〟であった。

寛永十六年（一六三九）七月初めのこと、六百石の旗奉行別所六左衛門の小頭が、六左衛門の妻女の銀子（ぎんす）である、といって、自分の支配の者に小金（こがね）を貸した。下級サラリーマンの家計は、いつの時代でもやりくりのいるもの。小金を借りて、ことをすませるようなことはしばしばある。直属する上司は、何といっても、ことをわかってもらいやすいから、いきおい、世話になりたいと思う。小額の金銭融通を受けるのには、最も結びつきやすい間柄といってよい。別所六左衛門の小頭の場合も、そのケースだ。自分の支配の者の窮状を救ってやり、しかも、その利子によって、自分の懐具合（ふところぐあい）もよくなるのであるから、正に、一石二鳥ともいえる。しだいにその手をひろげたのも自然の成り行きであろう。ことが、この程度におさまっておれば、もちろん、問題は起こらなかったにちがいない。しかし、何事でも、限度をきめることがむずかしい。まし

楽しいくらしのお手伝い
ホームセンター
アグロ
竜野店
竜野市竜野町富永
☎(07916)3-3226(代)
営業時間AM10:00～PM7:00
(定休日) 毎週水曜日
山崎店
宍粟郡山崎町今宿
☎(0790)62-2434(代)
営業時間AM9:00～PM7:00
(定休日) 毎週水曜日

て、それに関係する人びとの性情や教養、才覚といったものにさまざまのデコボコがあり、遂に、いろいろの出入り、行きちがいを生じ、あらそいが起こってくることも免れない。別所六左衛門組小頭の場合も、自己支配の者に貸すだけにとどまっておれば、別段、問題も起こらなかったのであろうが、融通を受ける組内の者が多くなれば、自然、他組のものの耳に入り、その融通を受けにくるものができてきた。これで、ことがらは、一歩、進んだのである。もちろん、たんなる事業としてだけみれば、発展の途をたどったのであるから喜ばしいしだいといってよい。しかし、元来、こうしたことをすべき立場でない武家社会内部のことである。他組の者にも貸す。そして、この事業がひろがって行く。これが、遂には、問題をひき起こすことになるのは、また、やむを得ぬことであった。

別所六左衛門組の小頭から、小金の融通を受けた他組の者の中に、石丸六右衛門・小川三郎兵衛の組下足軽が居た。この二人は、鉄砲二十挺を預る身分であったが、忘れてならないのは、古参の家中であるということ、そして、別所六左衛門が新参者である、ということだ。

このときの借銭の総額は三百匁ほど。これをだんだんと返済してゆき、残りは三十匁になっていた。これを、突然、全額一時に返済するよう迫られた、という。理由や事情は、記したものがないから不明であるが、返済を要求された足軽にとってみれば、急に、それだけの用意は、もちろんできない。そこで、「今暫くの猶予を」と、願い出た。

ところが、別所の小頭は、これに対し、

〝人のものを借りただけでなく、約束を違えるのは奇怪である。〟

と、盆送りの行事をすませたあと、石丸・小川の足軽屋敷の近くに出向き、両組の足軽を打擲（ちょうちゃく）した、という。どうしてこんなことをしたか、借銭のことはもちろんあるにしても、それが、たんらくに、この行為に結びつくようには、どうしても考えにくい。何かが裏にある。こう考えてみて、思いあたるのは、新参・古参の対立・反目、といった事態である。これが次第、次第に蓄積され、ふくらんでゆくと、何かのきっかけを求めて吹き出してくる。この事件も、背後に、こうしたにおいの看取される出来事だ。

別所組の小頭が、石丸・小川両組の足軽を打擲したことは、やった方に、「それだけの理由がある」といっても、それだけでおさまる筈はない。たちまち、両者の喧嘩となり、騒動となった。

事件の突発で、最も驚いたのは物頭たち。さっそく、これを取り鎮め、関係した十一人の物頭が双方の事情を聴取し、協議した。そして、そのはからいだ、ということで、喧嘩をした者の扶持を離した。これで、ともかく、この日のできごとは、一

応、落着した。巻頭に掲げた「種火」というのはこの事件を指すのであるが、もし、これが、ほんとうに落着しておれば、「種火」ではない。「種火」というのは、大事件の根底となった〝小さい出来事〟で、一見、何ほどのこともないように見えながら、長く時間を経るうちに徐々に拡張、発展して大事に立至る根源的性質をもつものを指すのである。この「一応のおさまりを見た」時点で、これが、後年、山崎藩を取り潰す大事件の発端になろう、などと考えたものは、果してあったろうか。恐らく、誰一人としてなかったにちがいない。

表装全般　…古いものを大切に…
表具師　松本永春堂
山崎町鹿沢本通り
TEL. 62－0122

宍粟郡における若干の小字地名

建部恵潤

一、構（かまえ）＝山崎町宇野

中世武士の屋敷地を呼ぶ名称は地方によって違いがあり、それぞれ地名になって残っている。土居、屋敷、堀ノ内、戸ノ内、竹ノ鼻、竹ノ内などで、東北の館（たて）は特色があるのでよく知られている。播磨では「土居」もあるが、「構」と呼ぶことが多かったようで、大字クラスの地名として、

竜野市
- 揖西町構
- 揖保町西構

揖保郡太子町岩見構

姫路市
- 林田町上構・中構・下構
- 飾磨区構

加古川市氷室の構

を国土地理院二万五千分の一地形図から拾い出すことができる。

屋敷の呼び名が地名になったのであるから、大きな地名よりむしろ小字名となることが多いと思われ、注意しているとすでに姫路市書写の「構江（かまえ）」、揖保郡新宮町馬立の「構」が知られていた。書写の「構江」は赤松氏の坂本城跡発掘調査

の手がかりになった（山本博利「書写坂本城跡発掘調査の概要」兵庫県の歴史19）。馬立の「構」は城山（きのやま）城主赤松氏の平常の居館があったことによる地名とされている（『新宮町史』）。

ところで、数年前山崎町役場で小字一覧表をいただき拝見したところ、宇野の小字に「構」が載っていた。宇野は長水城への登り口であるから、馬立の「構」と城山城の関係と全く同じで、長水城主宇野氏の平時の居館があった所とみて間違いあるまい。したがって、長水城の大手は宇野（近世の上町（かんまち）・中町の合併地名、「構」は上町に所属）であったこと、近世以前からの上町・中町・下町が長水城士の平常の住居を中心にした街村に由来した地名と推測されていたことを確実にする地名といえる。また、秀吉の長水城攻略がなぜ五十波の側から行われたのか理由も、防備のかたい大手を避けたことにあったといえる。攻略の実況を詳述する『長水軍記』は江戸中期の軍談物に過ぎない。従来長水城を語っても宇野の「構」を採りあげることはなく、『長水軍記』によっていたようである。確実な史料の少い長水城にとって、宇野の「構」は重要な地名史料といわねばならない。

小字名ではないが、一宮町安積の通称地名「構」も貴重な地名である。国道安積橋西詰の集落で、赤松氏の重臣安積氏の居館があったことによる地名である。その子孫は豊臣秀吉に所領を与えられ郷士として処遇され、近世に入ってからも池田輝政以降池田氏が宍粟郡一円を領村とした時代は郷士として構村を所領としたが、延宝七年（一六七九）本多氏山崎藩の立藩により山崎周辺一万石を除く全郡が幕府領となるに及んで止み、以後安積氏は庄屋として明治に至った。明治になって「構村」は東安積村と合併し安積村となったので、「構村」は公簿から消え、大字安積の中の通称地名として残っている。安積家には輝政以降の郷士時代の知行状を伝えている。二万五千分の一地形図には「構」の集落名を載せていないが、かかる歴史的地名は是非記載して欲しいと思う。

二、六路木（ろくろぎ）＝安富町皆河

宍粟郡の北部山間地帯は木地師が盛んに稼業した土地で、千種町西河内の集落木地山（きじやま）は木地師に由来する地名として有名で、木地屋関係の文献には必ずといってよいほど出てくる。宍粟郡の木地屋については宇野正碌氏が精査され『山崎町史』にまとめられている。

宍粟郡の木地師関係地名として一宮町千町の「ろくろし」が知られていたが、皆河の「六路木」（山林小字）も木地師に由来する地名として見のがせない。木地師は轆轤（ろくろ）を使って椀・盆などの日用雑器を製造するが、「ろくろし」は轆轤師で木地師である。「六路木」は轆轤木の当て字で、ろ。く。ろ。にかける素材となる木のことで、このあたりは器具を作るにより表材木を産したので、木地師がさかんに稼業した時代があったのであろう。

宍粟郡の木地屋というと郡北に限るように思われているが、安富町の「六路木」は木地師の稼業地が郡南に及んでいた証(あかし)となる地名である。地名は歴史の生証人といわれている。木地屋の伝承も残っていないが、「六路木」という地名だけが皆河も木地師の活動範囲であったことを伝えている。

三、梅中（うめなか）＝安富町皆河

明治十七年（一八八四）ごろ内務省地理局が各府県に小字名を調査提出させた。四百冊はあったという膨大な地名資料であったが、活用に至らず関東大震災に焼失した。明治には残っていた検地帳に載っている小地名ー田畠などの所在地名ーが全部載っていた。愛知県や長野県などでは県庁の倉庫に控が残っていて出版された。政府の命を受けた府県では各村に命じ従来使っていた「小名(こな)」（小地名）を全部書き出し、その中のどれを残すか、複数の小名を合併して新しい地名にするかなどを決めさせ、府県でまとめて政府へ提出したもので、現在市町村にある字限図（地籍図）以前の小地名を知る貴重な資料であった。県庁に控が残っていない兵庫県では、村で作った原本がどこかに残っていないか注意したい。しかし、近世の地詰帳、名寄帳村絵図などが現存していると、ある程度は近世の小名を知ることができる。

さて、皆河にはこれらの資料が全く残っていないが、明治十七年ごろ改変されたことが史料で立証できる小字に「梅中」がある。非常に珍らしい例であるが、気をつけていると思わぬ史料が出てくるものである。

「梅中」は筆者が生れ育ち現在住んでいる所の小字名であるが、元は「梅ケ岡」であったと、明治十五年（一八八二）生れの父が教えてくれたのは五〇年余り前であった。中学生時代のことであるが、不思議と印象に残っていた。父の少年時代にはまだ旧名が使われることもあったであろうし、地名改称の事情も伝聞していたであろうが、今となっては伝承すら残っていない。ところが、ここ数年の間に改称が史実であったことを示す史料が三例現われたのである。

第一は広本正利家の幕末期の婚儀祝控帳に「梅ケ岡」と添書した梅岡氏がみえる。皆河の梅岡氏は当時梅ケ岡（梅中）に医家の梅岡氏（眼科の名医恵迪の代）と新田に旧庄屋家梅岡氏（本家と分家）があったので、新田の梅岡氏との混同を避けるために住地を添書したものである。これを見たとき父の話が本当

本のある生活を——
さつき書房
山崎町鹿沢55-3
☎(0790)62-4674

であったことを知り、驚きかつうれしく思った。

第二は某家の頼母子講帳で、表紙に明治四年（一八七一）とある。ここでも医家の梅岡氏に「梅ケ岡」と添書がしてある。用紙四枚に講員を列記した簡単な記録であるが、明治四年にはなお「梅ケ岡」であったことが知られる貴重な史料である。頼母子講の世話人の家の土蔵に残っていたものである。

第三は梅中と隣接の行友は同一三昧を持って葬式づきあいをする慣例があり、葬用諸器具を共有してきた。この倉庫に「行友組　梅ケ岡組」と二行に割書した古い木箱があるのを知った。改称前に作ったものである。

以上の三史料から、小字「梅中」は元は「梅ケ岡」であったことが明らかになっただけでなく、「梅中」では意味不明の地名の由来を知ることができるようになった。

「梅」のつく地名の「梅」は植物のウメではなく「埋」の当て字のことが多いとされている。縁起のよくない「埋」に佳字の「梅」を当てたのである。大阪駅のある「梅田」は低湿地を埋め立てたので「埋田」とすべきを「梅田」と当て字した歴史があり、適例とされている。「梅中」も「梅ケ岡」であったから、埋ってできた岡が元義である。

現地についていうと、山麓には麓屑台地がみられるのが普通であるが、ここでは二つの谷があるが、土石流をおこして形成された谷とみられ、皆河公民館一帯の岡状の地形はその土石流で埋った部分と考えられる。埋没部の先端部はもっと伸びていたが切りとって水田にされたのであろう、高い石垣積みで段丘状になっている。埋没部分の上部はやや平坦で、畠・水田・屋敷・薬師堂境内になっていて、崩壊部との境には地下水が浸み出て湿地や水溜りがみられる。かかる地形が顕著なところに「梅」のつく地名が生れたようで、宍粟郡の小地名にも見出されることと思う。安富町塩野の「梅谷」も似た地形で湧水もみられる。

「梅ケ岡」は地形の成因を適格に表現した地名であるが、これを「梅中」に改めた理由はわからない。恐らく「中」のつく地名との合成地名であろうと考えている。

四、毘沙田（びしゃでん）＝安富町三森、山崎町土万

三森には毘沙門天像をまつった堂跡がある。明治になって堂を壊し、像は安志姫神社へ移したともいうが所在不明である。神仏分離がさけばれるときおかしな話だと思うが、毘沙門堂があったことから、小字「毘沙田」はその仏供田による地名であ

創業嘉永元年　きものと共に130余年
高級呉服の専門店
とくさや
山崎町本町（さつき通）
☎(0790)62-1680代

ろうと考えていた。

ところが、柳田国男『地名の研究』に、

尾社田あるいは毘沙田と書いた字の名もおりおりある。ビシャは正しくいえばブシャすなわち歩射で、村の社の春祭に的射を行ない、終って酒食を共にする風は今もまだ残っている。その日の用米を弁ずるために、番に当たった者の耕作する田があったのである。

とあるのをみると、三森の毘沙田もやはり歩射田で、三森に鎮座している安志姫神社の祭礼に歩射を行ない、酒食を共にするための田があって歩射田と呼んだのが転訛した地名とみてよいようである。歩射は神事として行なわれていたから、単なる推測ではなく、歩射田に由来する地名と解するのがよいと思う。土万の毘沙田も松尾神社の祭礼に歩射を行なったことに由来するのであろう。

農山村では鎮守の祭礼などの諸費用のための田があって、一般に宮田といった。毘沙田（歩射田）もこの類で、毘沙田周辺を含め地名化したのであろう。

五、湯ノ山（ゆのやま）＝安富町皆河

温泉や鉱泉が出るところには、それにふさわしい地名があることが多い。皆河の「湯ノ山（山林小字）」は狭い地域ではあるが、旧富栖村では薬湯（冷泉）の出るところとして知られていた。小さな谷を登った山の中腹で、谷から少しはずれた平坦地に約四メートルに三メートルの石積みの池があり、常に清水をたたえている。この水があせもや冷え性によく効くといわれ、近くではこの水を荷なって帰り風呂にたてた。子どもの頃荷なってかえるのをよく見かけたもので、今では伝説めいてしまい、戦前建てた池の覆屋も倒れて放置されているが、昔から付近の住民にとって生活に欠かせない薬湯であって、子どもでもよく知っていた。筆者も小学生時代何回かこの水でたてた風呂に入ってあせもをなおしたことを覚えている。極く近いところでは戦後三〇年代の中ごろまで利用したと聞いている。庶民の生活と深いかかわりがあったので、薬湯の湧き出る山として生れた地名で、庶民生活史の貴重な地名資料といわねばならない。

六、中須賀（なかすか）＝千種町河内・西山、安富町狭戸

スカ（須賀・須加）地名は東海関東に多いが、それ以外の地

外科・内科
山中医院
院長 山中陽一
山崎町西町・TEL⑥2 0036

方にも散在している。ス（洲）・カ（処）の意で、海岸や河川のほとりに立地し、砂浜や川原の砂礫に由来する地名である。多くは頭に形容することばが付き、大須賀・長須賀・横須賀・蜂須賀・白須賀などの地名がある。中須賀は普通にいう川の中洲と思えばよい。

山崎町須賀沢は近世の須賀村（幕府領）と蟹ケ沢村（三日月藩領）を明治初年に合併した須賀沢村が、明治二二年（一八八九）旧河東村の大字に移行したもので、現在も一般に須賀と呼んでいて、『播磨国風土記』宍禾郡酒加里（安師里の本の里名）の遺称地として知られている。また、横須も恐らく横須賀の省略で伊沢川の中洲に由来するのであろう。県下の大字クラスのスカ地名にもう一か所姫路市飾磨区須加がある。今は人家工場の密集地になっているが、元は河口の漁村で、河口や海岸の砂浜に由る地名である。

このように大字クラスのスカ地名は少いが、小字名となると、宍粟郡には千種町・安富町に三例あり、なお山崎町には田井の通称地名に「中須賀」がある。これは明治十七、八年の小名整理のとき廃され、通称地名として残っているのかも知れない。

飾磨郡夢前町、揖保郡新宮町にも小字に中須賀があるから、各市町の小字名がわかればさらに各地にみられる地名であろう。

以上少数でしかも安富町にかたよったが、特色があり重要な小字地名を紹介した。小字地名も地域の歴史や祖先の歩んだ生活史を秘めていて、その研究は郷土研究のためにも欠かせない部門である。

地名小噺

その三　清水口

資料部

清水口と言う地名は何時頃から出来たのであろうか、昭和の初め頃山崎史談会の一古老の話によると、古書に曰く、「昔山田高野口に銘水の湧出する井戸有りて旅人の喉を潤す」とあり、後その近くに茶店が出来て往来の人々に茶を接待したと言う。その後慶長年間姫路城主池田輝政の代官中村主殿介の役所がその上手に出来、人々は代官屋敷をお茶屋様と称した。そして代官所の門前から山の手へ続く道を山田町と呼び、その裏手を高野町と言ったが後元和元年（一六一五年）松平石見守の城下となりその家臣福原小左衛門の屋敷が出来たので高野町を福原町と呼ぶようになったと言う。又元和三年姫路城主が本多忠政に替ると、松平石見守輝澄は祖母蓮葉院殿の菩提所青蓮寺を姫路野里より山崎に移し、山田高野の切岸の上に建立した。又片岡醇徳氏の古文書によると寛永年間より因幡街道が元川東の出石を北に野航していたのを船元より川西に渡して山田村より町内を通す様に移し替え、町の入口に見附御門の木戸を設け関所とした。又岡山大学の文書室に有る松平周防守時代の地図を見ると木戸の内桝型の端、道路の南側に清水の口とした溜池が描れて有り、見附の木戸を京口と印るされている。又片岡氏の書にも周防守

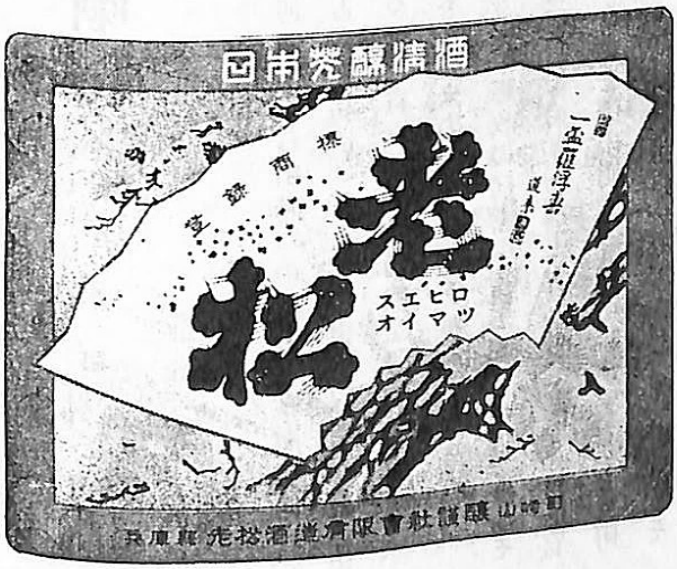
入部の時より清水口見附御門の岸の上に石垣と懸壁成ると書かれて有り、木戸の内と外に桝型の広場が有り、その間を上川が流れ木戸前に橋が掛けられ橋の外に練塀のくい違いが建っていて如何にも厳重な関所である事が窺える。又地図には京迄三十三里、篠山迄二十四里、亀山迄二十八里、大坂迄三十里と、清水口より、大川迄三丁五十六間と印るされてある。片岡醇徳の書にその時既に清水口と言う言葉が出ている。要するに京口と清水の湧き口とが一処になって通称清水口と呼ばれるようになったのが事実であろう。併し因幡街道とは言っても宍粟郡の道路は裏街道で、戸倉峠と言う難所があるので裏街道の通行人はそう多くはなかったようである。因幡の藩主も、余程の急ぎでも無い限り裏街道の参勤交替には通られなかったが、幕末国家騒乱の時には急ぎの参勤で通られる事があったと言う。又幕府崩壊の維新前夜は鳥取藩や松江藩の早籠や急飛脚の掛け声や、あわただしい馬の蹄めの音などに町の住民は何事が起ったのかと肝を冷したと古老達は語っていた。清水の湧く井戸も昭和の初め頃まではまだ有るにはあったが町が繁栄し人家が増えると共に水も次第に悪くなって銘水とは言いがたく石垣の間に笹にごりの浅井戸が有って道端から石段を五六段下りた横手に手杓が置いてあり、子供の頃水浴びからの帰えりなどによく飲んだのを覚えている。水は蛤水の様な薄にごりであったが確かに冷めたかった記憶がある。清水口の地名も今は町人に忘れ去られようとしている。

深情と地蔵崇拝

加藤昭彦

この度、私のような浅学非才なものに郷土研究会事務局より原稿依頼のお申し出があり、ほとほと困惑しましたが「軽い気持ちで書いていただいたら結構です。」という言葉に励まされて一筆取ることにいたしました。

もとより他との接触もなく片手間に自由に遊ぶという感覚の中でしか郷土歴史との接点をもちえなかった私にとって、歴史そのものの、真実の是非や年代とその背景を照応するといった術もなく、そうした難解なことは、諸先輩方にお任せして、郷土研究といった、知識の浅い私には面映ゆいことから少し離れ、深情（こころ）と地蔵尊について意の向くままに書くことにしました。



西院河原地蔵和讃

これはこの世のことならず
死出の山路の裾野なる
西院の河原のものがたり
聞くにつけても哀れなり
二つや三つや四つ五つ
十にも足らぬみどり子が
西院の河原にあつまりて
父うえ恋し母恋し
恋し恋しと泣く声は
この世の声とはこと変わり
悲しさ骨身をとおすなり
かのみどり子の処作として
河原の石を取りあつめ
これにて廻向の塔を組む
一重組んでは父のため
二重組んでは母のため
三重組んではふるさとの
兄弟わが身と廻向して
昼はひとりであそべども
陽も入相のそのころは
地獄の鬼があらわれて
やれ汝らはなにをする
娑婆にのこりし父母は
追善作善のつとめなく
ただ明け暮れのなげきには
むごや悲しやふびんやと
親のなげきは汝らが
苦患をうくる種となる
われを恨むることなかれと
黒鉄の棒をさしのべて
積みたる塔を押しくずす
そのとき能化の地蔵尊
ゆるぎ出でさせたまいつつ
汝らいのち短くて
冥途の旅にきたるなり
娑婆と冥途はほどとおし
われを冥途の父母と
思うて明け暮れたのめよと
おさなきものをみ衣の
もすそのうちにかき入れて
哀れみたまうぞありがたき
いまだ歩まぬみどり子を
錫杖の柄に取りつかせ
忍辱慈悲のみ肌に

いだきかかえてなでさすり
哀れみたまうぞありがたき
南無延命地蔵大菩薩

この和讃は、空也上人作として伝えられ、矢田寺地蔵菩薩和讃、岩船地蔵和讃など数ある中でもっとも有名で、皆様方もご存知のことと思います。

これは子盗ろ子とろの鬼から、子供を守る本尊として多くの人々の心をうち、親しまれてきました。

地蔵尊に対する現在の大人たちの認識は、

（亡き子供に対する供養
現世の子供の守護仏
現世利益）

のように思われますが、それと同時にもう一つ、（大人の心の中に棲む童心への憧憬と鎮魂）をも、含まれているのではないかと私は考えます。

地蔵尊に対して合掌したり、祀ることの中にいつしか知らず知らずのうちに大人たち（自分自身）の失なわれていった、美しくも気高い子供ごころに対する憧憬と滅んでしまった無邪気さへの鎮魂が含まれていることを、私はふと感じる時があります。それは、人生の哀楽をようやく覚えた人々が、静かに瞼を閉じ合掌する姿の、或る時は優しさや、或るいは淋しさを、背中越しに見受けたときなど殊に強く感じます。そのような人々の心の中には、様々な人生があり、然しそのいづれもが等しく子供の頃のような純粋さや爛漫さを、その人生の数の分だけ知らず知らずのうちに失ってきたことに変わりなく、それに気づいたとき、言いようもない淋しさを感じるというのも人の常ではありましょう。

例えば、人生のある意味での世間的な成功者であっても心を許す場所が、どこにもないといった淋しさを感じることも少なくはないように思います。

（元来、地蔵尊とは菩薩（仏になるための修行者）であって仏との約束により、この世の中のすべての人々を救い、極楽に送り届けることを使命とされています。）

私たちが、もう一度深いところで、そのことに気づき真摯に自分自身の心を問うという時間こそ今の時代には大切なことではないでしょうか。

いつの時代にも少数の人々の手によって、地蔵尊の美しい灯が守られてきたと言うことに思い至るとき、遥か昔よりの人間の営為に心が熱くなるような気がします。大雲寺往来地蔵（さずけ地蔵）は、その深情（こころ）を受け継ぎ地蔵まつり－子供の集い－を通して、子供たち大人たち一体となり心と心の触れ合いの中で、一概にとらえられているところの現世利益だけではなく、自分自身をゆっくりと見つめ直すという時間がもたれているようです。

とりとめのない文章に終始しましたが、最後に大雲寺さずけ地蔵尊の由来を記して、この稿を終わることにします。

享保年間当時、山崎は大火、飢饉が相続き、物情騒然たる世相を憂慮された当山第九世相蓮社実誉上人が、泰平祈願を目的とし、人々の幸福なる日々を切に願い、享保八年四月十五日建立されたこの地蔵尊は、信仰深き人々の家々に「さずけ事」を持って夜間訪ねられ、明け方には地蔵堂へ帰られるという言い伝えがあり、別名往来地蔵とも呼ばれこの評判を聞いた人々が脇棚にひかえている分身地蔵を二体持ち帰る騒ぎまであったとされている。宗派を問わずあらゆる人々の願い事を聞きとげられるこの有難い地蔵尊は爾来多くの人々に信仰されている。

合掌

丹波路旅情

—秋の研修旅行記—

織金義雄

モクセイの甘い香りに誘われて、丹波路の旅に出ました。

総勢一五〇名、昨六一年一〇月五日午前八時、三台のバスに分乗し、恒例のとおり神姫バスセンターを出発しました。

目指すは柏原、篠山両町。信長没後もその一族が明治維新まで所領した。織田藩二万石の城下町柏原と、デカンショ節に天下普請で名高い、青山藩六万石の城下町篠山です。

中国道、滝野社インターから国道一七五号線に入り、酒米の王者山田錦の故郷、北播の穂波をかき分けるようにして、北上しました。西脇市附近では、ガイドさんから、播州織物や、東経一三五度北緯三五度に位置する日本のへそ公園、教祖生誕一〇〇年祭に賑わう円応教（信者数約三〇万人）の詳しい説明を受けました。車中からそれらの建物も望見されました。

県薬草試験地が設けられている、薬草の里山南町を経て、予定どおり一〇時ころに柏原町役場隣りの観光案内所に到着しました。待ち受けて下さった藤本正也元教育長さんらのご案内をいただきました。

最初は、県指定天然記念物の木の根橋。案内所すぐ横の樹齢六〇〇年というケヤキ、その根が奥村川をまたいで自然の橋をつくって

います。道路から、川原から感嘆の声が挙がっていました。

北側の森には、八幡神社が鎮座まします。石清水八幡宮の別宮として、一〇二四年に創建されましたが、再度の火魔に見舞われ、一五八五年秀吉の寄進をうけて再建されたのが現社殿で国の重文指定を受けているそうです。境内の厄神さんの例祭は日本最古の厄除祭として有名で、二月一七、一八日には毎年一〇万人余りの参拝者があり、広い長い参道が埋まる光景が想像されました。社殿後ろには神仏混淆の名残りといわれる三重の塔が、秋の日差しに照り映えていました。廃仏毀釈の際には、文書庫として難を免れたそうです。

観光案内所から南の商店街を経て、大手前通りを東へ一直線に進むと陣屋です。一七一四年造営当時のままの長屋門、といっても左側に畳敷の番所、右側に板敷の馬見所と砲庫を備えた今風にいう三ＬＤＫマンション以上に広い大きな門をくぐると荘重な藩公邸の陣屋が現われました。千鳥破風と唐破風を重ねた正面玄関、質素ながらも威厳を備える大書院。桃山時代の御殿、書院造りの遺構では、二条城をはじめ全国で五箇所しかない、そのうちの一つの国指定の史跡と聴きました。邸内の一角に建つ田捨女（でんすてじょ）さんの童女像が、南隣りの小学校を温かい眼差しで見守っています。因みに捨女さんの後裔、田秀夫さん（参院議員）のいとこの近親者の方が、菅野地区にお住まいです。大手前通りの家老屋敷跡には裁判所、周辺には税務署、郡民会館県総合庁舎等があり、道端の用水路には鯉が沢山泳いでおりました。

商店街は、山崎同様時々折れ曲がり、城下町特有の町並みを残しております。ぐるぐると案内されて、方角が分からなくなりかけたころ、太鼓やぐらがそびえていました。藩士に登下城の時刻を知らせていたとか。但馬出石の辰鼓櫓（やぐら）より、痛みが少し激しいように見受けましたが。

柏原の皆様方の厚遇を感謝しつつ、国道一七六号線を南下し途中鐘ケ坂ファミリーランドで、幹事さんお心尽しの昼食を摂りました。「ビールは付いてないんか」という声も飛んでおりましたが、酒を仕入れてご気嫌になられた方も大勢あったようです。よく宣伝している鐘ケ坂しょうぶ園は、どのあたりだろうと探していると、神姫観光の方から「播州山崎花菖蒲園の方がずっと立派ですよ」と言われ、安心して車中へ急ぎました。

丹波の都篠山は、笹山という小山に、徳川家康が城を築かせてから、篠山という地名が起ったと聞きました。保養施設ユートピアささ山を過ぎてしばらくすると歩兵第七〇聯隊跡です。「儂（わし）は篠山聯隊におったんや」「このあたりに軍隊当時の友達が住んどるんや」「何とか（字名を聞いたのですが……）いう所や、ガイドさん知らんか」と往時を懐かしむ声があちこちに起りました。つわものどもの夢の跡、広大な一帯は、県の丹波総合スポーツセンター、篠山総合庁舎、産業高校、たんば荘等諸施設が整備され、夏草の生い茂る余地はありません。戦争中ご苦労なさった方々のお蔭で、今日のこの平和と繁栄の恩恵を

受けることができるのだと心から感謝致しました。

大型バスは、二階町通りの狭い商店街を上手にくぐり抜けて篠山歴史美術館横の大駐車場にたどり着きました。ここでは、篠山地方観光協会のボランティアの方々が待って下さっておりました。この美術館は、最高裁が篠山裁判所の不燃庁舎新営のため取り壊すところを、町当局が（三万円で）払い下げを受け約一億円をかけて改装されたものです。外観、間取りは略原型どおりです。旧法時代には検事局、登記所、供託局が同居していました。棟をはじめ屋根の要所要所には、明治二四年建築以来そのままの菊のご紋章入りの瓦十数枚が輝いています。北隣りには、美術館とよくマッチした美しい郷土物産館ー休憩所、売店、食堂ーがあります。農協の経営で、山の芋、黒大豆、篠山ビーフ等特産物を産地直売していました。地元商店街との競合を遠慮してか品目は少いようです。柏原の観光案内所の方は数多く陳列し、品不足になると各商店からすぐ取り寄せて、販売に精を出しておられ、従業員は、ボランティアの奥さん方であると紹介されましたが、なかなか愛想よく商売熱心でした。

食品の店
いまや
さつき通り4丁目
TEL ⑥② 0169

町役場、市民会館の建て並ぶ大手通りを南進すると篠山城の大手門跡です。ここから壮大な高石垣が始まります。一六〇九年徳川家康が、大坂城攻略の拠点として実子松平康重をここ笹山に移封し、総奉行に姫路城主池田輝政、縄張り役に藤堂高虎を配し、豊臣家恩顧の大名の財力を費消さすためもあって、丹波以西の西国二〇家の外様大名に扶役を命じ、最低一万数千人伝説では八万人の人夫を動員して、わずか六か月の突貫工事で石垣を完成させたそうです。天下普請といわれる所以です。別図のように、石垣の各所にはさまざまの紋様が刻み込まれて残っております。石工たちは何を言わんとしたのでしょうか。農民ら人夫は、おそらく天役として半強制的に駆り出されたのでしょう。日当は満足に貰ったのでしょうか。明治初期の廃城令により殆んどの建造物が取り壊され、唯一残っていた大書院も昭和一九年焼失し、今は何もなく再建の話も聞きませんでした。本丸跡、二の丸跡からデカンショ広場に降り、南馬出（うまだし）土塁から小林家長屋門に至りました。藩主に忠勤を励んだ老女に隠居部屋として下賜された武家屋敷跡だそうです。案内していただいた小林家よりもう一つ西の通り（西外堀から二本目）のお徒士町通りの方が、小さいながらも両側に武家屋敷が集団的に残っており、昔の雰囲気がよく味わえると思いました。

歴史の残り香、文化の薫りが、町一杯に漂う篠山に名残りを惜しみながら、車は東馬出、東外堀、法務局横を通り、今田町丹波伝統工芸公園立抗（たちくい）陶の郷に向いました。

陶の郷、唐様の良い名前です。トイレもそこここに陶芸教室に飛び込みました。親子夫婦孫九人分の湯呑みに、思案を巡らせながら妻と手分けをして名前を入れ、絵付けをしました。一一月に嫁いだ末娘の嫁入り荷物の片隅に、婿のものと一緒に幸せを祈りながら忍ばせました。展示即売室では、紺屋町の方をはじめ、多くの方々が発車時間を気にしながらも名品を選んでおられました。

午後六時ころ、道中恙無く帰山しました。最後に思いがけない雨に遭い、難渋致しましたが、これも旅塵を洗い流してくれる恵みの雨だと思いなおして、家路に着きました。

昭和六十二年度役員

役職名	氏名
名誉会長	谷口巌
顧問	前田昇
〃	庄和夫
〃	壷阪寿
〃	伊藤親保
〃	前田連
会長	堀口春雄
副会長	久保寅夫
〃	福山清一
事務局長	安井清介
総務部長	福山清一
会報部長	大谷司郎
研修部長	志水美好
史跡部長	久保寅夫
資料部長	横井時成
山崎地区 西支部長	高野薫
〃 東支部長	野上久男
城下地区 支部長	小川久雄
戸原地区 〃	志水正信

役職名	氏名	住所	TEL
河東地区 支部長	山下宇一	矢原	六二、一九〇五
神野地区 〃	田中義弘	三津	六二、〇九八八
蔦沢地区 〃	平瀬捷一	東下野	六五、〇〇二三
菅野地区 〃	福井久夫	青木	六二、二六八五
土万地区 〃	赤松善之助	塩山	六七、〇三三三
監事	志水武雄	上比地	六二、一九六七
監事	谷川道一	元山崎	六二、六九八七

谷川道一様には山崎西地区支部長として、志水武雄様には城下地区支部長として、秦耕三様、沢田友栄様には長年にわたり監事として、伊藤次郎様には資料部長としてお勤めいただきましたことに対し衷心より感謝申し上げます。

各部々員と地区幹事の紹介は第七〇号に掲載します。

事務局だより

一、会報第六十九号より町内のお地蔵さまについての記事を連続掲載する予定になっております。

二、会報第六十九号配布と同時に本年度会費一、〇〇〇円を地区幹事さんにご集金よろしくお願い申し上げます。

三、春の研修旅行案内を会報に挿入しています。参加ご希望の方は早目にお申し込み下さい。

四、本年は山崎郷土会報発刊十五周年に当

健康づくりの相談が気軽にできる店

ごころ薬局

薬剤師 岸本八重子
岸本弘子

山崎町東和通り・☎(0790)62-1190

最新型カラー現像機導入
カラープリント・スピード仕上げ

宍粟郡山崎町東鹿沢26-3☎62-2089

り秋には一泊旅行の計画もありますが、日帰りか一泊か、行先等について皆様方のご希望について春の旅行の際にアンケートを実施する予定にしております。

（山崎郷土研究会事務局）

山崎町

安井清介宅

株式会社

安井書店

宍粟郡山崎町山崎90
TEL山崎(62)0700(代)